

# 自己認識の構図

## *Boswell's London Journal 1762—1763* 論(I)

青 木 健

### 序

伝記作者は〈他者〉を対象にその生涯にわたる思想と行動を追跡して一貫した人物像造型に努めるが、ひるがえって、伝記作者が探求の対象を〈自己〉に求め自己をどのように追求するかという問題は興味深いものである。*Life of Johnson* (1791) の作者 James Boswell (1740—1795) は夥しい「日記」類(“Private Papers” と総称される)を書き残したが、今世紀におけるその劇的な資料発見のプロセス<sup>1)</sup>もさることながら、そこに書き記された自己記録は Boswell の内面世界を雄弁に映し出す声の記録であり、「日記」の形式を借りた明らかな自叙伝とみなすことができる。

特に、*Boswell's London Journal 1762—1763* (1950年刊)として知られる Boswell の「日記」には、特定のシチュエーションに置かれた22歳の青年が内外の体験を通して〈自己追求〉し、〈アイデンティティ〉を求めて苦闘する自我の軌跡が浮き彫りにされている。〈外部体験〉の記録は「当時のロンドンの風俗習慣、文壇、劇壇の有様、社交界の様子<sup>2)</sup>」を活々と現代に伝えているが、他方、〈内面世界〉の記録を通して、Boswell 自らが分析する〈自己の姿〉には、〈アイデンティティ〉の保証に疑問を投げかける不安定な精神が露呈しており、〈近代的自我の発露〉とする見解を許している<sup>3)</sup>。

「日記」の性質上、Boswell は鳥瞰図的に自己を眺め、回顧的に自己を語るのではなく、一日一日の短い時間内の自己を捉えようとしており、同時に、社会道徳への思惑や自己弁護としてでなく、あくまで自己

に忠実に自己の眞の姿を説明しようとする。Boswell の自己注視の姿勢は、人物は〈ヒューマー〉によって決定され、社会規範に則った人物として、つまり、〈タイプ〉として描かれるのが課題であった従来の人間観と著しい対照を見せている。Boswell はそのような類型的人物像造型に安易にくみせず、徹底した〈自己観察〉によって、〈自己確認〉を求め。さらに、彼の自己解釈の試みは独自の〈表現形式〉と結びつき、自ずとその精神構造に内側から照明が当てられている。*London Journal* の編纂者 F. A. Pottle によれば、Boswell は火曜日ごとに1週間分の「日記」をエディンバラの友人 Johnston に書き送って読ませていたという<sup>4)</sup>。とすれば、他者の眼に触れることが前提となっているわけであるが、Boswell は伏字や暗号といった思わせぶりな手段に訴えず、時に性的露出症を思わせるほど自己の恥部を平然とさらけ出している。

さて、*London Journal* は Boswell が1762年11月15日、故郷エディンバラを出発、ロンドンに向かうところから始まり、9ヶ月余のロンドン滞在後、法律習得を目的として、オランダのユトレヒトに向けて出発する前日(1763年8月4日)で終わっている。結局、9ヶ月余のロンドン滞在中に Boswell が体験するさまざまな出来事とそれらに対する自己省察の記録が「日記」の中核をなしている。ロンドン上京の目的は近衛連隊(“the Guards”)入隊のつてを求めることであったが、その裏には、専横的な父と自立を求める子との間の葛藤という家庭的問題が秘められており、ユーモラスな Boswell の姿と対照的に *London Journal* 全体にただようある種の緊張感はそれに起因している。

*London Journal* が内包する別な興味は、後に伝記の対象となる Samuel Johnson との劇的な出会いが含まれていることである。当時 Boswell の意識に Johnson がどう映っていたか、Boswell にとって Johnson の存在がどのような意味をもっていたか等、伝記との比較の上でも興味深い問題を含んでいる。本論では *Life of Johnson* との正面切った関連を充分吟味する余裕はない。ここでは、伝記の作者が〈他者〉ではなく、〈自己の姿〉をどのように追求したかを〈表現形式〉とのからみで考えてみようと思う。さらに言えば、筆者のねらいは〈伝記〉と〈自伝〉の接点を探るための基本的作業として *London Journal* を考察する点にある。

## I

ところで、Boswell は「日記」をつけ始める際に、その〈目的〉と〈意図〉に関連するいくつかの点を明らかにしている。*London Journal* の特質を探る上で重要な示唆を与えてくれるのでそこから見ることにする。まず、注目すべき次のような言葉にぶつかる。

A man cannot know himself better than by attending to the feelings of his heart and to his external actions, from which he may with tolerable certainty judge “what manner of person he is.” (p. 39)

Boswell がここで述べている「いかなる人物か」(“what manner of person he is”)とは換言すれば、〈アイデンティティ〉の問題である。彼の意図は自己の内面と外部に表われた行動を正確な眼で凝視し、それらを記録して、そこから自己の〈アイデンティティ〉を探り出そうということである。彼自身にその認識があったかどうかは別として、人間性の本質的な問題、ある意味で哲学や心理学の研究対象となるべき問題を彼は扱おうとしたのである。それは、親、他人、社会との相互的なかわりあいの中で自覚され評価される〈相互的な自己〉のみならず、自省によって自覚される〈主観的な自己〉の探求をも意味する。Boswell は変幻極まりない〈現実の相〉を捉え、押し寄せる多様な主観の波に抗して、自己にとってあくまで〈正当なアイデンティティ〉を得ようとする姿勢を崩さない。

後述するように、*London Journal* の中で彼は従来抱いていた〈漠然とした観念〉と〈現実〉との亀裂を意識し始め、異質なものの存在を明確に認識してゆくプロセスを記録している。自己の正当性を頑迷に主張するのではなく、異質なものとのお出会い、自・他の相違に対する驚きをも忠実に彼は記録する。それまでその存在を疑わなかった従来の根から離れ新しい根を下ろすプロセス——精神的覚醒——がそこには暗示されている。

Boswell は「日記」(“journal”)がそうした目的に合致すると次のよう

に説明している。

I have therefore determined to keep a daily journal in which I shall set down my various sentiments and my various conducts, which will be not only useful but very agreeable. (p. 39)

「さまざまな情念と行動」(“my various sentiments and my various conducts”)の中には、「それぞれ異なった主題についての折々の思索」(“my thoughts on different subjects at different times”) (p. 39) 等、意識的且つ形式的な思考のみならず、触れたくない事柄、なるうことなら忘却の淵へ押しやりたいものも含まれるべきである。それらを恐れて回避すれば、十全な〈自己探求〉は期待できない。自己との安易な妥協は許されないはずである。その点 Boswell は自己体験の記録に憑かれた飽くなき追求者であった。「わたしの心に次々と湧きあがってくる空想」(“the whims that may seize me and the sallies of my luxuriant imaginations”) (p. 41)をも書き留めることを決意している。Boswell は人生に付随するすべてのもの、たとえ夢想といえるもの、一見無意味な空想さえも自己の理解に必要なだとしている。彼には、〈外界のデテール〉と〈内面世界のデテール〉は等価であり、〈リアリティ〉は〈体験の総体〉から成るという認識がある。

*London Journal* での Boswell の〈自己認識〉の原則は30年後 *Life of Johnson* の導入部で説明する〈他者認識〉の方法と緊密な関係がある<sup>5)</sup>。対象が自己であれ他者であれ、検証の素材を〈体験の総計〉に求める姿勢は根本的に同質であったと言える。Boswell にとって体験を記録する行為はそのまま人生を生きることであったことは、後に「日記」に関するエッセイで述懐する次の言葉でも明らかである。

Sometimes it has occurred to me that a man should not live more than he can record...<sup>6)</sup>

極端に言えば、書き留めえないものは体験する価値がないということである。したがって、彼の人生にとって、意味のあるものは文字に定着で

きるものだけということになる。〈デテール〉に対する Boswell の執拗な愛着は、〈現実〉は〈真の世界の仮象〉にすぎないとする前世紀までの世界観と鋭い対立を見せ、「〈現実世界〉が唯一の〈真の世界〉であり、具体的な細部観察こそ〈究極の真理〉を知る第一の方策とする時代精神を反映する」のが、それも記録魔 Boswell の奇癖を抜きにしては考えられない。*London Journal* に見出されるさまざまな奇行、アイロニカルな姿は自己の具体的な誤りさえも飾らず記録し、無防備の構えない姿を捉えようとした結果であり、そのためにはあくまでも、〈主観的な真実〉に忠実になることだとする Boswell の認識がその底流にある。

次に、*London Journal* の書き出しで Boswell が表明する第三の点を見てみよう。

It will give me a habit of application and improve me in expression; and knowing that I am to record my transactions will make me careful to do well; or if I should go wrong, it will assist me in resolutions of doing better. (p. 39)

ここに意図されているのは明らかに〈自己改革〉の期待である。内外の体験を記録し、そこに表われた自己の姿を検証すると同時に〈自己矯正〉の試金石にしたいという。「日記」の〈効用〉を目指したこれらの言葉の趣旨は30年後に *Life of Johnson* の中で言葉をかえて繰り返されている。

... as a lady adjusts her dress before a mirror, a man adjusts his character by looking at his journal.<sup>8)</sup>

「女性が鏡の前で、姿を映しながら服装を正すように」、記録した体験から自己分析し、性格を調整してより優れた人格への飛躍台にするのだという。文字通り「日記」は〈自己を映す鏡〉となっている。

こうして、*London Journal* で Boswell は三つの課題——内外の詳細な体験記録、自己検証、さらに自己調整——を自己に課し、一日一日の行動と自己省察から確固とした〈アイデンティティの把握〉を試みたことがわかる。

「ジャーナル」あるいは「日記」は半生を回顧する一般の自叙伝と異なり<sup>9)</sup>、一日という短時間の体験の記録のため、時間的距離による想像の空間を許さない。日記をつける行為は素材が生々しく、書き手の反応も新鮮なため〈自己検証〉が〈書く行為〉と同時的に行われるという内実をもつ。その意味で、日記は〈行為中の自己〉を捉え、現在の書き手自身の眼で自己の体験を検証するのに適している。換言すれば、「日記」は新たな〈自己発見〉の可能性を多分に含んだジャンルといえる。Boswellは「日記」が内含するこの性質を〈自己認識〉に援用しようとしたわけである。

以上、*London Journal*における〈意図と目的〉を検討した。次に〈アイデンティティ把握〉がどのような形で追求されたか、その有様を主として〈追求の方策〉に焦点をあてて *London Journal* の特質を分析してみたい。

## II

結論から言えば、Boswellの〈アイデンティティ追求〉は結果として自己を不安定な一貫性を欠いた人物として浮かび上がらせている。しかし、その過程で彼は興味深い方法を展開しているので、まずその点から見てみる。

「自己はどのような人物か」(“what manner of person he is”)というテーゼの裏には「自己が他者にどう映るか」という問題に対するBoswellの深い関心がこめられている。むしろ彼は異常なほど他者に映る自己の姿に神経をとがらせる。後述するように、それはさらに、自らの意志で自己から抜け出し想像の中で理想とする人物との自・他合一を試みるまでに至っている。

次の文はロンドン上京まもない1762年12月1日の記録であるが、Boswellの自意識を示す典型的な例と思われるので少々長いが原文を抜いて見る。

On Tuesday I wanted to have a silver-hilted sword, but upon examining my pockets . . . , I found that I had left the most of my guineas at home and had not enough to pay for it

with me. I determined to make a trial of the civility of my fellow-creatures, and what effect my external appearance and address would have. . . . "Mr. Jefferys," said I, "I have not money here to pay for it. Will you trust me?" "Upon my word, Sir," said he, "you must excuse me. It is a thing we never to do a stranger." I bowed genteelly and said, "Indeed, Sir, I believe it is not right." . . . "Come, Sir," cried he, "I will trust you." "Sir," said I, "if you had not trusted me, I should not have bought it from you." . . . I then chose a belt, put the sword on, told him I would call and pay it tomorrow, and walked off. I called this day and paid him. . . . "Sir," said he, "we know our men. I would have trusted you with the value of a hundred pounds." This I think was a good adventure and much to my honour. (pp. 59—60)

ここには〈他者の反応〉を実験するという過剰な自意識が虚栄心の形をとって表われており、〈人格〉は〈外的装い〉と不即不離の関係にあるとする Boswell の価値観が露呈している。彼のそのような意識は、さらに対人関係における自己防衛的な姿にも示されている。彼は自己の弱点を看破されるのを極度に恐れて、身近な友人の評価にも敏感に反応する。Garrick 等との会食を終えた晩、彼は次のような反省の言葉を記録している。

I was very hearty at dinner, but was too ridiculous. This is what I ought most to guard against. People in Company applaud a man for it very much, but behind his back hold him very cheap. (p. 121)

筆者の疑問はかほどに自意識過剰な自己防衛的な Boswell が秘密の匂いのする個人的な「日記」を友人とは言え他者の眼に晒す行為に何故あえて出たかという点である。これを矛盾とみてそれを衝くのも一興であろうが、筆者は単なる矛盾でなく、導入部で漏らした「表現力がつく」("improve me in expression") という言葉と符合すると考えたい。〈内面

の記録〉と〈他者の眼〉に晒されるという意識、この相反するものを一致させるために Boswell は調和のとれた〈表現形式〉にその解答を求めたと思われる。〈体験の総体〉が必然的に内包する不適切な記録の内容——書き手の強烈なエゴや危険な女性関係等——を他者の眼に耐えうるものにするにはどうするか。結局、それは〈体験〉と〈表現〉との間のバランスをどうとるかという問題に帰着したと考えられる。

*London Journal* 全体を通して、Boswell が文体に強い関心を払った形跡は明瞭である。それは単によい文章を書くということのみならず、文学的効果を伴うことを意味していた。こうして、*London Journal* は〈自我の発露〉としての内実のほかに〈表現形式〉がクローズアップされる必要性がはっきりしてくる。Boswell の〈過剰な自意識〉は「他者に映る自己の姿」への異常な関心となって顕在化したことは既に述べたが、それは Boswell 独特の〈自己確認〉の一面を示すものであり、*London Journal* には次々と主体的に〈自己確認の場〉を追いつめてゆく姿がある。彼は以前の自分の同一性と次の自分の同一性がどんなに相反するものであっても〈自己確認〉の試みを中止せず、試行錯誤をくり返して、〈真の自己把握〉を求める。彼の行為はいわば〈アイデンティティの拡散〉であり、〈モデル追求〉という不思議な行為として表われるが、その副産物として、文学的効果を伴う独自の〈表現形式〉を生み出している。あるいは時に逆の現象——文学的効果を目的として、恣意的に〈アイデンティティの拡散〉を試みる——ともみられるほど両者は緊密な関係にある。

Boswell はロンドン上京まもない1762年11月21日の項に次のような興味深い言葉を記録している。

Since I came up, I have begun to acquire a composed genteel character very different from a rattling uncultivated one which for some time past I have been fond of. I have discovered that we may be in some degree whatever character we choose. Besides, practice forms a man to anything. I was now happy to find myself cool, easy, and serene. (p. 47)

「程度の差こそあれ、自己を好む人物に変えうることを発見した」(“I have



discovered that we may be in some degree whatever character we choose”)  
と〈自己変容〉の可能性をほめかす Boswell の言葉は「他者に映る  
自己の姿」への根強い関心の延長線上にある。彼はロンドンという自由  
な空気の吸える都会で自己の可能性を極限まで試そうとした。求めるも  
のは〈真の自己〉であり、その到達点に至るまで、自己選択と自己定義  
をさまざまに試みようとしたのである。

1763年7月4日の行動記録は〈アイデンティティ拡散〉を実行に移し  
た典型的な例である。「今日は王の誕生日だ。そこで私はごろつきに変  
装して眼に映るものみな見てやろうと決意した」(“It was the King’s  
birthday, and I resolved to be a blackguard and to see all that was to  
be seen”) (p. 272) と語り出した後、「ごろつき」(“blackguard”)に変装す  
ると、次々と故意に騒動を起こし、第三者の反応を吟味する。ある者には  
「床屋」(“barber”)と呼ばれ、ある者には「退役将校」(“half-pay of-  
ficer”)とみなされ、ある所では自ら「おいはぎ」(“highwayman”)と名  
乗って脅しをかける。最後に Boswell はこの“adventure”を次のよう  
に締めくくっている。

My vanity was somewhat gratified tonight that, notwith-  
standing of my dress, I was always taken for a gentleman in  
disguise. (p. 273)

もちろん、上記のような体験は稀である。*London Journal* ではむしろ、  
自己選択のプロセスは多くの場合 Boswell の内面世界に見出される。  
彼はしばしば、外部に表われた行動に対する省察に独自の想像力を  
加えて自己の体験ならびに直面しているシチュエーションを想像世界と  
の対比で解釈しようとする。彼は嬉々として自分の個性の殻を破り、自  
由に卓れたものに合一し、同化吸収される。いわば、主体的に自己放棄  
し、自由に自分の想像する世界、共感する想像の世界の中に没入してゆ  
くのである。一般に自・他の同一化は幼児より成熟する前の青年期に至  
るまで、各々の段階で多様な形をとってみられるが、問題は同一化の対  
象・動機・意味づけにみられる差異である。*London Journal* における  
Boswell の同一化の特徴は彼の文学体験と深くかかわっている点にあ  
る。彼は同一化の対象をしばしば著名な文学作品に求め自分が直面して

いるシチュエーション（体験）をそれらが内包する意味や価値あるいは情念を通して吟味しようとする。

1763年2月27日、Boswell は矛盾した自分の姿に驚嘆した後、次のような興味深い言葉をつけ加えている。

Let me consider that the hero of a romance or novel must not go uniformly along in bliss, but the story must be chequered with bad fortune. (p. 206)

「ロマンスや小説の主人公は幸福なままであってはならず、物語は不幸というあやがつけられねばならない」という言葉は *London Journal* における Boswell の〈自己把握〉の方法と彼の想像力の特徴を物語っている。彼は現実を直視する前にまずそれを一つの物語として捉え、自己を物語の主人公に引きつけ重ね合わせて現実の劇化あるいは虚構化を行おうともくろんでいる。彼によれば、ヒーローとなるには「不幸」という“interlude”（「幕間劇」）が必要であり、運命の変転は必然的であって、幸運も不運もハッピー・エンディングに向かって巧妙に構成された一つのパターンに属するものとなる。

事実、Boswell は想像力をかきたて、自己を文学作品の主人公になぞらえ、その人物を通して自己解釈を試みたり、自分が現実に置かれているシチュエーションを作品の名場面に置きかえて、自己の体験を作品が内包する意味に結びつける。いわば、彼は想像力によってリアリティを変容させ、新たなリアリティを創造する小説家や劇作家と同質の方法に訴えて、自・他の合一化をはかり、多様な〈アイデンティティ〉を想像の中で体験し、最終的な〈自己認識〉を得ようと試みるのである。たとえば、ロンドンに向けての出発は「広い世間に向かう息子の旅立ちのシーン」（“The scene of being a son setting out from home for the wide world”）(p. 41) と映り、Oxford への小旅行に際しては、「遠出を楽しむかのスペクテーターを空想する」（“I imagined myself the Spectator taking one of his excursions”）(p. 244)。ジレンマに陥った気持をハムレットの心境と比較し(p. 96)、風流紳士に憧れる時は Addison を偲び(p. 61)、血気盛んな時は *Beggar's Opera* の奔放な主人公 Captain Macheath に自分を仕立ててみる(p. 62)、という具合である。

*London Journal* における自・他合一化の対象の変質過程はそのまま Boswell の意識変化、心境の変化を暗示している。優雅と風流の理想像としての Addison, Steele, Digges から後には一転して、“a man of a most dreadful appearance” たる Johnson へと傾斜するが、その意味については後に検討するとして、さしあたっては Boswell が、自己判断の基準を、理想とする人物や場（それが文学作品にあることは述べた通りである）に求め、それらによって自己体験を吟味し、自分の意識や情念を調整しようとする点を指摘しておく。一般に〈文学〉は〈現実〉を模倣すると言われるが、*London Journal* では、〈現実〉を〈虚構の世界〉に従属させようとする逆の現象が見出されるのである。

既に触れたように、多様な自・他合一化は人生体験の劇化ないし虚構化であり、そこではたされる同一性はまだ想像の中の同一化にすぎない。あくまでそれはパーソナリティの可能性であって現実の社会的自己として主体性をもったものではない。それはちょうど、子供達がいろいろなアイデンティティを自分のものにしようと試みる姿に極めて類似している。彼らのそれは空想の産物であって、その試みのいちばん根源的なものは「遊び」の精神である。子供は「遊び」の中で、ライオンにも英雄にもなること（同一化）ができるが、この「遊び」は成長するにつれて、もっと社会的な人間像・思想・価値観に対する同一化へと発達してゆくものである。

しかし、Boswell の〈アイデンティティ拡散化〉は子供におけるような現実逃避やいたずらな空想による忘我とはニュアンスが異なり、〈文学的変容〉と深くかかわっている点に特徴が見られる。同じく空想の翼を伸ばすにしても、Boswell は意識的に多様な同一化を試み、その試みの中で客観化され対象化された自分の言葉や姿が文学的にどのように昇華されるかを凝視するのである。ここであらためて *London Journal* における〈表現形式〉が問題となる。

### III

*London Journal* の文学的効果を求めるとすれば、まず、演劇的演出がクローズ・アップされるべきであろう。Richard J. Jaarsuma は「人生を舞台の役者の眼で捉えようとする」<sup>10)</sup> と、物語の主人公との自己同

一化をめざす Boswell の姿勢を説明している。たしかに演劇の世界が醸し出す華やかな空気は終生 Boswell の心を支配していたようである。ロンドン上京前、既にエディンバラで耳目を集める演劇通であった実績をもっていた Boswell は上京後も劇場通いを続け、Garrick 等演劇関係者との交遊の有様をしばしば記録している。*London Journal* に見出される〈演劇的方法〉は Boswell の〈演劇志向〉に根ざすものと考えて差支えないであろう。

彼はさまざまな人達との会話あるいは対話を単に「記録」するのみならず、彼の言葉で言えば、会話の場面を「えがく」(“painted”<sup>11)</sup>)のである。ロンドンで Boswell と何らかの関わりをもつ人物の階級と職業とは驚くほど多方面にわたっている。Lord Bute, Lord Eglington, Lady Northumberland 等の貴族, Sheridan, Garrick, Goldsmith そして Johnson 等の文学関係者, その他多くのスコットランド出身の友人達, さらには下宿の主人・女中に至るさまざまな階級と職業の人々。Boswell はこれらの人々との間で交わされた会話に、その場に応じて〈演劇的演出〉をほどこし、その場の情景と情念を伝えようとする。貴族との対話<sup>12)</sup>では対等な“English Gentleman”として、また、Louisa なる仮名のもとで登場する女性との対話<sup>13)</sup>では“a Man of Pleasure”<sup>14)</sup>として自己の姿を描き出しながら、Boswell は自己同一化の可能性を自己の表現能力あるいは描出能力に賭ける。自・他の合一が達成されるかどうかは、場面全体に文学的効果が発揮されたかどうかにかかっている。〈表現形式〉が〈自己認識〉に深くかかわってくるのはこの時である。

次の対話は Louisa とのあいびきの記録のである。「ト書き」“stage direction”や「独白」“soliloquy”が挿入されており、「風習喜劇」(“Comedy of Manners”)を彷彿させる演劇的演出が明らかにほどこされている。

LOUISA. No, really, Sir. I am distressed with a thousand things. (Cunning jade, her circumstances!) I really don't know what to do.

BOSWELL. Do you know that I have been very unhappy since I saw you?

LOUISA. How so, Sir?

BOSWELL. Why, I am afraid that you don't love me so well, nor have not such a regard for me, as I thought you had.

LOUISA. Nay, dear Sir! (Seeming unconcerned.)

BOSWELL. Pray, Madam, have I no reason?

LOUISA. No, indeed, Sir, you have not.

BOSWELL. Have I no reason, Madam? Pray think.

LOUISA. Sir!

BOSWELL. Pray, Madam, in what state of health have you been in for some time?

LOUISA. Sir, you amaze me.

. . . . .

BOSWELL (to himself). What the devil does the confounded jilt mean by being hurt in her circumstances? This is the grossest cunning. But I won't take notice of that at all.—Madam, as to the opinion of everybody, you need not be afraid. I was going to joke and say that I never boast of a lady's *favours*. But I give you my word of honour that you shall not be discovered.

LOUISA. Sir, this is being more generous than I could expect.

BOSWELL. I hope, Madam, you will own that since I have been with you I have always behaved like a man of honour.

LOUISA. You have indeed, Sir.

BOSWELL (rising). Madam, your most obedient servant.

(pp. 159—160)

ここには“a man of honour”との同一化に成功した得意気な Boswell の姿がある。「ト書き」と「独白」が付加されることにより活々とした臨場感が生まれ、二人のかけひきに緊迫感を添えている。こうした演劇的対話こそ *Life of Johnson* を他の追従を許さない伝記の古典にしている要因の一つであることは周知のことである。次は *Life* の 1 例である。

Johnson... "I am afraid I may be one of those who shall be damned" (looking dismally). Dr. Adams "What do you mean by damned?" Johnson (passionately and loudly). "Sent to Hell, Sir, and punished everlasting."<sup>15)</sup>

こうして、30年後類似の演劇的手法はふんだんに使われ、多様なシチュエーションのもとで Dr. Johnson の姿が劇的雰囲気を伴って描出されるが、それ以前に Boswell は自己の姿をドラマ風に見る不思議な人間観察者であったことがわかる。

Boswell は前記のあいびきの場면을 "a man of pleasure" との同一化を目指して描出しているが、次のように、コーヒー・ハウスでの客同士のやりとりも第三者の位置から演劇手法を用いて描き出す<sup>16)</sup>。次の例は Child's Coffee-house で Boswell の耳に入ってきた会話である。

1. Citizen. Pray, Doctor, what became of that patient of yours? Was not her skull fractured?

Physician. Yes. To pieces. However, I got her cured.

1. Citizen. Good Lord. (p. 94)

この時 Boswell は部外者であり、会話の内実は無に等しいが、200年前のコーヒー・ハウスでのまぎれもない会話とその活々とした息吹を現代に伝えている。日常のさりげない会話に永遠の生命を与えて意味や価値を与える力こそ文学的感性の一要件とすれば、たしかにそれは生来の資質として Boswell に備わっていたと思われる。

さらに、Boswell の〈文学的資質〉と〈自己認識〉の融合は文体の多様性にもよく表われている。移り気な自己、それが *London Journal* の主題であるかのように、Boswell は文体に多彩な変化を加えている。彼はしばしば場の雰囲気や自己の情念に適合する文体を用いて、感情の昂まりや道徳理念の昂揚をすくいとろうとする。古典からの引用<sup>17)</sup>、擬人化<sup>18)</sup>、あるいは格言の類<sup>19)</sup>によって味つけされ彩りを添えた多彩な文体は事実の伝達にあるというより、書き手の心理状態を明らかにし、情念を直接伝えるはたらきをしている。次の文では分裂ぎみな自己の心を見つめるうちに昂まる情感を文体がうまく捉えている。

And now I swear that this is the true language of my heart. O why can I not always preserve my inclinations as constant and as warm? I am determined to pursue it with unremitting steadiness. I don't despair of having a regiment. O why don't my friends encourage me in it? Surely I ought not to languish in idleness. And surely so delicate a mind as I have cannot be greatly blamed for wavering a little when such terrible obstacles oppose my favourite scheme. (p. 205)

一方、Johnson の影響下に入って、道徳理念を披瀝する時、Boswell は Johnson への恭順の姿勢を文体に表わし、その影響の大きさをひそかに伝えようとする。シラブルの多い語、名詞節中心の構文、没個性的で重々しい調子、つまり、Johnson 流の“grand style”を目指しているのである<sup>20</sup>。こうして、*London Journal* では、文体が多岐に変容する Boswell の内面世界の表現手段という機能を荷っていることが理解される。

以上検討した演劇的演出と多彩な文体は意識的な〈アイデンティティの多様化ないし拡散化〉の中から〈真のアイデンティティ把握〉を目指す Boswell の試みの副産物として生まれたことは既に述べた通りである。元来単調な形体である日記の内実を単に体験の記録に終わらせず、恣意的操作を加えて審美的効果を期待することは〈アイデンティティ把握〉をむしろ困難にする傾向にあることはやむをえない。しかし、〈表現形式〉を〈自己認識〉の問題と切り離して考えてみると、Boswell の並々ならぬ想像力に舌をまく。街の女を漁るという〈非道徳行為〉も〈言語化〉することにより、一つの文学的形態が与えられて、芸術的に昇華できることを Boswell は実証したのである。記録した体験を、たとえその体験の内実は罪深いものであろうと、〈文学的装い〉によって、一つの美しい形態に染めあげ彩って、Boswell は自らそれをエンジョイするのである。〈非言語的事実〉に活々とした表現を与えるにはフィクションに生命を吹き込むと同質の想像力を必要とするであろう。F. A. Pottle は Boswell の想像力を評して、「想像力について言うなら、Boswell は Dickens や Scott に匹敵する」(“Boswell was a great imaginative artist—the peer in imagination of Scott and Dickens”)<sup>21</sup>と述べ

ている。要するに、Boswell は現実生活の出来事の中に、フィクションに要求されるのと同質の意義ある関係を見つけ出す文学的資質に卓越していたと言えよう。Boswell は〈真空〉から創造することはない。しかし、抜群の記憶力を駆使して記録した〈現実の出来事〉を想像力によってふくらませる能力の持ち主なのである。しかも、体験の記録の事実性に支えられて、極端なデフォルメや虚言の印象を与えずに文学性をもたせる能力に長けている。

一方、〈体験の劇化〉は既に述べたように、自己を他者に没入するため、個性喪失的性質をおびる。自・他の合一化は体験の内実と感覚的意味の〈普遍化〉をもたらすと言えよう。逆に言えば、個人的関連物が除去される。つまり、〈自我(ego)の消去〉を結果するのである。Boswell の〈自我消去〉はかならずしも自己の姿を消去することを意味せず、むしろ、自己の姿を前面に押し出しながら、〈自我(ego)〉を消去するという微妙な形をとって表われる。これは *London Journal* における〈表現形式〉のメカニズムの本質的要因と考えられるので、Boswell の〈自己認識〉のプロセスを追う前に一言触れておきたいと思う。

Boswell には、一方で、体験しながら、他方でその体験を他者がどのように見るかについても強い関心を払っている。外界と切り離されたまったくの個人的体験を享受しながら、同時にそのユニークさに驚く第三者の意識をも客観的に対象化して描くのである。しばしば見出される「独白」的な自己との対話でも Boswell は自己を他者の眼でみつめ自己を対象化する。

Alas, alas, poor Boswell! to what an abject situation art thou now reduced! Thou who lately prided thyself in luxuriance of health and liveliness of imagination art now a diseased, dull, capricious mortal. Is not this a just punishment for thy offences? It is indeed; I submit to it. (p. 194)

ここには明らかに意識の二重性を認めることができる。また、彼はある時(1762年11月28日)教会で、敬虔な祈りを耳にししながら、心の中で女漁りを計画するエピソードを記録している。



What a curious, inconsistent thing is the mind of man!  
In the midst of divine service I was laying plans for having women, and yet I had the most sincere feelings of religion. I imagine that my want of belief is the occasion of this, so that I can have all the feelings. I would try to make out a little consistency this way. I have a warm heart and a vivacious fancy. I am therefore given to love, and also to piety or gratitude to God, and to the most brilliant and showy method of public worship. (p. 54)

二律背反的な思考と行動の自己分裂に一驚しつつ、Boswell は人間心理の複雑さを認識しているのである。ここには分裂している自己の姿を凝視するもう一つの自己の存在が意識される。piety「敬虔の念」とsecularity「卑俗な心」、これら相反する情念が自己の内部にあることを彼はよく承知した上で、その矛盾を通して James Boswell ならしめているものを定義しようとするのである。Boswell は想像の中で、自己を抜け出し、一步距離を置いて立ち、自己を眺めることによって、自己定義をはかる。いわば、彼は登場人物と冷静な観客とを同時に演じるのである。単に外部に表われた行動を第三者の眼で語るのではなく、語り手自身の心がそれにどのように反応しているかも第三者が眺めるように語るため、内と外との間に一種のドラマが構成される。M. Price は「語り手自身が対象人物であり、同時に観察者という形は Boswell に始まる」<sup>22)</sup>と述べている。

このような意識の二重構造は彼にさまざまなシチュエーションと多様な〈アイデンティティ〉を許したと考えられる。どのように想像力を奔放に飛翔させようと、それを見つめる冷静な眼が一方にある以上、それらにのまれて自分を失う危険はないとする姿勢が Boswell にはうかがえる。奔放なイマジネーションを駆使して変幻自在に他の人物になりすまそうとする自己と、その自己を対象化し、行動と心の動きを心理的距離を置いて冷静に見つめるもう一つの自己。London Journal における〈自己表現〉の独自性はこの意識の二重性に支えられたものである。この意識の二重構造的手法は、より洗練された形で、またより大きな時間的空間を含んで、Life of Johnson に認められる<sup>23)</sup>。(この稿続く)

〔注〕

1) Cf. Editor's Note in *Boswell's London Journal 1762—1763*, ed. F. A. Pottle (Heinemann, London 1973) 以下このテキストによる。

2) 福原麟太郎：『ジョンソン大博士』福原麟太郎著作集 2 101頁。

3) Cf. P. M. Spacks: *Imagining a Self* (Harvard Univ. Press, 1976) Ch. 8 Young Men's Fancies. E. W. Bruss: *Autobiographical Acts* (The Johns Hopkins Univ. Press, 1976) Ch. III James Boswell. J. O. Lyons: *The Invention of the Self* (Southern Illinois Univ. Press, 1978) Ch. 7 Confessional High Tide.

4) Pottle, *op. cit.*, p. 8.

5) *Life of Johnson* の導入部での次の説明は典型的である。

Indeed I cannot conceive a more perfect mode of writing any man's life, than not only relating all the most important events of it in their order, but interweaving what he privately wrote, and said, and thought; but which mankind are enabled as it were to see him live, and to "live o'er each scene" with him, as he actually advanced through the several stages of his life.

*Life of Johnson* (Oxford Univ. Press, 1976), p. 24.

6) *The Hypochondriack*, in two vols Vol. II (Stanford Univ. Press, 1928), p. 259.

7) Lyons, *op. cit.*, p. 96.

8) *Life of Johnson* (Oxford Univ. Press, 1976), p. 898.

9) 当時まだ, "autobiography" は使用されていない。OED では1809年の例が最初である。

10) Quoted by Spacks in *Imagining a Self*, p. 132, from R. J. Jaarsuma Boswell the Novelist: "Structural Rhythm in *London Journal*" *North Dakota Quarterly* (Spring, 1966), p. 52.

11) 1763年1月12日, Louisa との出会いの場面を語った後, 次のように Boswell はしめくくっている。I have painted this night as well as I could. (p. 140)

12) Lady Northumberland (pp. 133-134) Lady Mirabel (pp. 142-143) Lord Eglington (pp. 169-170, p. 223)

13) Louisa (pp. 74-75, pp. 94-105, p. 115, pp. 221-222)

14) 1763年1月12日 Louisa とのあいびきでの自己の姿を次のように説明す

る。 I surely may be styled a Man of Pleasure. (p. 140)

15) *Life of Johnson* (Oxford), p. 428.

16) Cf. pp. 74-75, p. 94, p. 105, p. 115, pp. 221-222.

17) E. g. That Ceres and Bacchus might in moderation lend their assistance to Venus, I ordered a genteel supper and some wine. (p. 137)

18) E. g. O my journal! Art thou not highly dignified? Shalt thou not flourished tenfold? No former solicitations or Censures could tempt me to lay thee aside . . . . (p. 305)

19) E. g. Out of sight, out of mind. (p. 214)

20) 1763年7月15日付の次の文はその典型である。

Since my being honoured with the friendship of Mr. Johnson, I have more seriously considered the duties of morality and religion and the dignity of human nature. I have considered that promiscuous concubinage is certainly wrong. It is contributing one's share towards bringing confusion and misery into society; and it is a transgression of the laws of the Almighty Creator, who has ordained marriage for the mutual comfort of the sexes and the procreation and right educating of children. Sure it is that if all the men and women in Britain were merely to consult animal gratification, society would be a most shocking scene. Nay, it would soon cease altogether. Notwithstanding of these reflections, I have stooped to mean profligacy even yesterday. However, I am now resolved to guard against it. (p. 304)

21) Lyons, *op. cit.*, p. 14.

22) Martin Price: "The Other Self." In *Imagined World* (Methuen, 1968), p. 280. ". . . this situation in which a narrator is both the subject and the observer begins with Boswell."

23) Cf. 「伝記における視点の二重性」——*Life of Johnson* の技法——『成城文芸』第84号, 95頁—117頁。